



学校だより 神橋

令和5年5月31日

よこはましりつかみはししょうがっこう
横浜市立神橋小学校



学校 HP QR コード

6月号

とりあえずやってみよう

ふくこうちょう かくの よしひろ
副校長 角野 義宏

5月27日(土)に開催した「かみリンピック(運動会)」は、全力で取り組む子どもたちの姿で満ちあふれていました。その姿は、爽やかに輝き、心を打つものでした。特に、6年生は最高学年としての成長が感じられ、頼もしく感じました。

さて、神橋小学校では運動会はもちろんのこと、委員会や係活動などで、児童が役割をもち活躍しています。役割があるということは、多くの場合、事前に役割分担が行われます。私は、この役割決めの場面になると、いつも思い出すことがあります。それは、私が6年生の担任をしていた時の4月に、委員会決めでしていた時のことです。その時は、放送委員会の希望者が多く、放送委員会の希望者の中から誰かが別の委員会に移動しなければならなくなりました。なんとも重苦しい空気が流れる中で、ある児童が別の委員会に移動すると言ってくれました。その瞬間、クラスの全員が驚いた顔を今でも鮮明に覚えています。なぜなら、その児童が前年度も放送委員会で活躍していて、今年度は委員長になると誰しもが思うような子だったからです。そんな状況もあり、みんな口々に、「いいの?」と確認していました。そんな中、その児童は「私はどんな委員会でもがんばれます。やったことのない委員会だからといってその委員会がいやだとは思いません。だから大丈夫です。」と言いました。自然と拍手が起きました。

私は、その言葉を聞いてハッとしました。丁度その頃、私自身が自分の役割に対して、「なんで自分が? やったことがある人がやればいいのに」と思い悩んでいたからです。おそらく、初めてやることに対して、できるかどうか分からず不安だったのでしょう。私は、その児童の言葉で大切なことに気付かされました。

人は、「やったことのないこと」に対して、できるかどうか不安で、「やりたくない」という気持ちになってしまうがちです。当時の私もそうだったのだと思います。ですが、やってみると案外できることだったり、楽しめたりするものです。そして、最後までやり遂げた時は、いつも以上に達成感や充実感がありますし、新しい自分の発見にもつながります。

私は、子どもが「やってみよう」と思うためには自己効力感を高めていくことが大切だと考えています。自己効力感とは、「自分ならできる」と自分を信じられる力のことです。自信がなくても「やってみよう」と思える気持ちを育てたいのです。育てるためのポイントは3つです。1つめは、親や先生、周囲の友達に自己の存在を認められているという「安心」。2つめは、自分は課題を解決し、目標を達成することができるという「自信」。3つめは、今はできないけど、努力すれば将来できるかもしれないという「希望」。この3つを子どもがもつことで、自己効力感は高まります。なので、何か良い結果が出た時には、結果や能力ではなく、努力を認めるのです。能力があるかどうかは関係ない、努力した過程が素晴らしいというメッセージを送ることで、メッセージを受け取った子は、「またやってみよう」と挑戦する気持ちが芽生えるはずですよ。

初めてのことに挑戦することは、新しい自分との出会いでもあります。私は、学校が多くの出会いの場に

なるように、「^{あんしん}安心」「^{じしん}自信」「^{きぼう}希望」を^{いしき}意識して^{しえん}支援を^{つづ}続けていきたいと^{おも}思います。^こ子ども^{たち}達が多^くの^あ出会い^{なか}の中で^{おお}大きく^{せいちよう}成長していくことを^{ねが}願^{わたし}って。私^{わたし}も、「とりあえずやってみます！」